

沖合漁場資源調査

大田市沖におけるエッチュウバイの資源管理とエッチュウバイ かご網の網目選択性 (抄録)

安達二郎・清川智之

はじめに

資源管理の持つ意味は、ただ単に資源を維持増大させることだけでなく、漁業の生産性を向上させ、漁業の永続性を保つための方策である。このためには資源状態を評価し、その評価に基づいた最適な漁業のあり方を考え、実行すべきである。すなわち、それが漁業管理であり、その具体的な方策が漁業規制である。漁業規制は一般に、漁船・漁具数の制限、漁場・漁期の制限、漁獲量の制限、漁獲物の体長制限に大別される。

島根県では1986年から大田市沖合のエッチュウバイ漁場において、エッチュウバイかご網の漁業管理を実施しているが、前述の各種漁業規制のうち、漁獲物の体長制限だけは1989年から実施された。なお、調査結果の評価は“日本海ブロック試験研究集録第20号”に報告している。

調査結果の概要

1. 大田市沖におけるエッチュウバイの資源管理

- 1) 大田市のエッチュウバイかご網漁業の規制は、漁船数12隻、かご網1隻あたり750個、総漁獲量220トン、漁期6～8月、漁場859漁区、殻高40mm未満のエッチュウバイの漁獲禁止である。
- 2) 漁業管理を開始した1986年から1989年で、漁獲量は200トン前後で推移し、年令組成も変化がなく、現在までのところ管理は順調になされている。
- 3) 漁業管理の開始された1986年の年令組成から、Z（全死亡係数）の値は0.961と推定された。この値は当時、859漁区においては処女資源であったと考えられることから、ほぼ自然死亡係数に近いと考えられる。

2. エッチュウバイかご網の網目選択性

- 1) 10mmの間隔で、20～60mmの5種類の網目を用いて、漁獲実験をしたところ、網目の大きいもののほど漁獲個体の殻高は大きくなり、漁獲尾数は少なくなった。
- 2) 現在、大田市のかご網漁船は約20mmの網目を使用しているので、小型個体の漁獲される割合が大きい。したがって、個体が大きく成長し、体重も増加した時点で漁獲する方が有利であり、今後、経営的なことを考慮しつつ、網目を40mmに拡大していくことが、漁業の生産性を高め、永続性を保つことになろう。